三木市（兵庫県）

持続可能な都市の実現をめざす「日本一美しいまちづくり」

藪本吉秀
三木市長

新たなまちづくりへの一歩を促す「財政危機宣言」

兵庫県三木市は平成20年9月29日に「財政危機宣言」を発表した。現在1期目の藪本吉秀三木市長は平成18年の市長就任以来、公約に掲げた助役の廃止、職員の給与カット、第三セクター・三木鉄道株式会社の廃止など多角的な財政改革を実施し、平成18年度・19年度だけで約21億円もの効果額の達成に成功している。その結果、三木市における現在の財政状況は、実質公債費比率などの指標上ではむしろ健全とさえいえる。

「それでも市税や地方交付税の減少に伴う収入減はやはり大きく、さらに市民病院の急激な経営悪化に対する財政支援の増加などの悪条件が重なり、市の財政は全体的に悪化し続けています。このままでは5年後に財政再生団体に転落することも十分に考えられます。財政危機宣言はそうした『三木市の本当の現実』を市民の皆さまや市職員に明確に認識していただくのと同時に、三木市が持続可能な都市へと生まれ変わるのに不可欠な市民・職員双方の強い意識改革を促し、これを契機に本当の意味での市民参画型のまちづくりを目指そうという『新たなまちづくり宣言』でもあるのです」

財政危機宣言の真意をそう語る藪本市長は、「さらに――」と言葉を続ける。「これまでの役所は『臭いものにはふた』式で、財政状況などについても本当に立ち直れなくなるまで危機宣言をしないという傾向がありました。しかし、そうなる前に、体力がまだあるうちにピンチをチャンスに変えようと努力するのでなければ、真の意味での財政改革を実施していることにはならないと思います」

今後は職員数の削減、給与の見直し、財政を圧迫する市民病院の経営改革などを断行する一方、地場産業の振興や企業誘致、市民協働の種をまき続けることなどにより、平成21年度からの5年計画で、一般会計で約50億円の収支改善を行うことも併せて発表した（市長自身も1期目終了時＝来年に予定されている退職金の受け取りを拒否している）。人口8万人規模の自治体にとって5年間50億円の収支改善は大きな負担である。

だが、藪本市長は「孫子の代、さらにその先の未来に至るまで健全な状態の三木市を残すためにも、不退転の決意で取り組んでいきたい」と力強く語った。

市民力をエネルギー源とする3つの視点のまちづくり

藪本市長は厳しい財政改革を新たな発展への礎ともするためには「3つの視点によるまちづくり」が必要だとしている。3つの視点とは《元気力の創造》《市民力の結集》《まちの再生》である。

「《元気力の創造》は、地域社会を元気付け、収入の確保を図るため、雇用増加に必要な産業振興の戦略を最優先で展開することを指します。特に三木市の伝統産業として知られる金物産業や農業振興を図り、同時に旧中心市街地の商店街を活性化するためにも、人々の交流という視点を加えることで、人・モノ・お金が循環していく流れとしての仕組みを創造していきたいと考えています。

《市民力の結集》は、誰もが安心な共生社会をつくるのに不可欠な視点です。中でも障害のある方の自立した生活を支援するため、かねて準備を進めていた身体・知的・精神の3分野の障害者を対象とする市立障害者総合支援施設『はばたきの丘』を、この4月には開設します（注＝3月初旬取材）。また、市民の皆さまによるまちづくりを進めるためには、市役所自身が市民の皆さまとともに行動する必要があります。私が市長に就任して以来進めてきた『日本一美しいまちづくり』は、市役所と市民が手を携えながらまちの未来を考え、官民の力を一つに結集していく仕組みづくりでもあります。

さらに《まちの再生》は、《元気力の創造》《市民力の結集》を進める過程で生じてくる、まちづくりへの市民の皆さまのエネルギーによって、まちが生まれ変わっていくことです」（藪本市長）

県内外から約18万人もの人々が詰め掛ける「三木金物まつり」（毎月11月開催）

後に述べるように、藪本市長は就任以来、厳格な行財政改革を断行する一方で地場産業である金物産業の振興と、外部からの積極的な企業誘致を図ってきた。さらに市民に対し、事あるごとに促してきた市民協働への誘いが実を結んで、例えば地区別のまちづくりを自分たちで考える市民協議会の機運も少しずつ高まってきた。特に、市立福祉会館内に市民活動の拠点として設置した「三木市立市民活動センター」の効果も手伝って、数年前には考えられなかったほど、まちづくりに対する市民の側の熱意が上がってきた手応えがあるという。

「今後は旧町ごとにある10カ所の市立公民館

「三木金物まつり」で行われる金物の古式鍛錬

まちづくりに目覚めた市民が集う「三木市立市民活動センター」

を、生涯学習の場であると同時に市民の皆さまと行政の情報共有の場であり、まちづくり活動の拠点とも位置付け、各公民館に配属された職員が市民の皆さまに寄り添いながら、地域の元気づくりを進めていく場へと発展させていくつもりです」（藪本市長）

まちを再生する「日本一美しいまちづくり」の心

前出のように三木市再生のスローガンは「日本一美しいまちづくり」である。「日本一美しいまち」というと景観の美しさ、市街地の清潔さなどといった表面的な意味に連想が及びがちだが、三木市の「美しいまちづくり」の真意は別のところにある。

「自然や町並みなどの景観を美しくしていく取り組みはもちろん重要ですが、私たちは清掃やあいさつ、子どもの見守り活動をはじめ、市民がまちをよくしていこうとするまちづくり活動全般を尊いものと考えます。それらに取り組む中での心の持ちようそのものが、とても美しく、価値あるものなのだという認識の広がり、浸透を目指しています。一人ひとりが日常の中でできることを、自分のためだけでなく、人のため社会のためにも汗をかこうとする姿そのものに、美しさを見いだしていきたいと考えています。そのような活動を通して自分自身に自信を持つとともに、周囲の人々との信頼関係が生まれることで、まちへの愛着がさらに加速度的に育ってくることでしょう。まちづくりを進めるための市民協議会が自然発生的に芽生えつつある事例などが、それを証明しています。三木市流の『日本一美しいまちづくり』とは、市民や職員がわがまちへの自然な愛着を原動力とし、自らの考えと行動でまちをよりよくしていこうと連携していく行為が、永続的に連環していく状況を目指すことにあるのです」（藪本市長）

三木市における市民協働事業の一例としては、平成14年に市民活動グループ「三木城下町まちづくり協議会」が発足したことに始まる。三木城下町まちづくり協議会は、織田信長の命を受けた羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）が三木城にこもる別所長治を攻めた三木合戦において、秀吉が負傷兵の治療や自らの湯治を有馬温泉で行ったという故事にちなんで、三木市中心市街地から有馬温泉に向かう「湯の山街道」の町並みを生かした地域活性化の事業を中心に、多彩な活動を行っている。

美嚢川の土手に咲くあでやかなサクラ

三木合戦中に秀吉軍が湯治した有馬温泉に至る歴史街道「湯の山街道」の町並み

三木市は日本酒の酒米・山田錦の産地としても知られ、毎年３月には「山田錦まつり」が開催される

さらに、これからの取り組みとして平成21年4月～6月の毎週日曜日には、兵庫県が主体となって県内各地で行われる観光イベント「あいたい兵庫デスティネーションキャンペーン（DC）」が三木市でも開催される。これを契機に三木市の歴史や金物づくりなどの素晴らしさを観光客に体感してもらうとともに、商店街の活性化や三木市の食文化の発信などを積極的に行うべく各種市民グループの力が集まっている。そのため現在、三木市では観光による三木の再発見と魅力づくりに向け、官民を挙げた盛り上がりを見せている。

「市政およびまちづくりへの市民参画を持続発展させていくには、こうした一つ一つの契機をとらえ、うまく活用していくことが重要ですが、そのためには市民の自発的な活動を全面的に支えるための体制が行政にも求められます。そのための方策の一つとして、都市計画や区画整理などを担当する従来の『都市整備課』を平成19年度から『美しいまちづくり課』へと改称しました。この措置には市民と市役所との垣根をより低くする効果とともに、美しいまちづくりに取り組む職員の意識改革の狙いもあります」（藪本市長）

美しいまちづくり課と改称された効果について職員に聞いてみると、とにかく市民からの電話の数が増えたとの回答があった。町並み保全や市民生活の安全安心にかかわることなら何でも、時には他課の管轄である要件・苦情などが寄せられることも少なくないという。そうした場合、以前なら管轄違いであれば電話を単に回すだけだった。しかし、市民の側に「美しいまちづくり課というからには、とにかく町並みやまちづくり全般についての責任ある窓口なのだろう」という認識が強いため、たとえ他課の管轄であっても、まず自分たちが「まちづくり全般の市役所の窓口」であるという自覚を持ってきちんと受け答えし、その上で他課に回す必要があれば回すなど、明らかに取り組みへの意識が変わってきたという。

三木金物の伝統的製品は鋸（のこぎり）、鑿（のみ）、鉋（かんな）、鏝（こて）、小刀。そのほか利器工匠具など金物関連の製造品出荷額は年間約530億円

好調な企業誘致と伝統ある金物産業の振興

三木市は周囲を緑濃い丘陵地帯に囲まれた自然の豊かな都市だが、神戸市に隣接する神戸都市圏の中央部に位置するだけでなく、市内を3つの高速道路（インターチェンジは3つ）、2つの国道が走る交通の要衝であり、アクセス面での地理的条件に恵まれている。そうしたアクセスのよさを活用すべく造成され、平成15年から分譲が開始された「ひょうご情報公園都市」（三木市志染町。事業主体は兵庫県企業庁）は第1工区18区画の企業立地を目指していたが、市長自ら誘致努力を重ね、現在、残すところは1区画だけとなっている。

『ひょうご情報公園都市』へは新神戸・三宮方面から車で30分、西神方面からは20分、三木の中心市街地からも20分で着きます。山陽自動車道の三木東インターチェンジに隣接しており、昨年末にはヤクルト本社新工場の進出が正式に決まりました。この人気の高さは全国トップクラスの高速交通基盤、神戸市に隣接していることによる大都市・空港・港湾への優れた交通アクセス、豊富な地元労働力、充実した立地支援制度などが好感を持たれたものと分析しています。今後はさらなる区画の拡大を兵庫県とともに図り、継続した企業誘致を行い、安定的な雇用を生む新産業の創造を進めていきたいと考えています」（藪本市長）

こうした外部からの企業誘致とともに、三木市で積極的に進められているのが再三言及してきた伝統ある地場産業・金物産業の活性化および振興である。三木市の金物産業は、金物のまちとして全国屈指の存在になってからの歴史だけでも400年以上に及ぶ。そもその起源は5世紀の中ごろとされ、製鉄技術、鍛冶技術、大工技術が三木の地で醸成されていたが、羽柴秀吉が三木城を落とした三木合戦の終了後、秀吉は城下町・三木の再興を図り、多くの大工が全国から三木に集まった。その際に伝来の優れた鍛冶技術が三木にあることが知られ、産業として大きく育つきっかけとなった。さらに江戸時代に技術的

最近、人気が復活してきた「肥後守」は三木洋刀製造業者組合の登録商標
（道の駅みき『金物展示館』にて）

成熟を遂げ、近代以降は交通網の発達とともに販売網が広がり、全国屈指の金物特産地としての確固たる地位を築く。

平成20年2月には「三木金物」が特許庁から地域団体商標の登録を受け、三木金物は名実共に地域ブランドとなっている。

来るべき豊穣の収穫を得るための布石

三木金物の名声は、三木金物の歴史を受け継ぐ現代の優れた鍛冶職人たちの技術に支えられている。だが伝統産業全般にいえる後継者不足と技術者の高齢化は、三木金物にも影を落としている。そこで三木市では技術者養成のために業界が行っている技術継承セミナーなどへの助成や、市と業界が開催する「三木金物大学」により販路の拡大を目指している。また、緊急雇用対策・地域活性化対策として国の臨時交付金を活用し、見本市の開催や新たな商品開発と販売を促進するための会場などに活用するコンベンションホールの整備を計画している。

「毎年11月に三木市で行われる『三木金物まつり』には、県内外から18万人もの人々が詰めかけます。地元産の金物を一堂に集め展示・直売するだけでなく、産地としての三木市の大きな全国発信になっています。三木金物の膨大な製品は現在、『道の駅みき』でも常設展示・販売されていますが、約1000㎡のコンベンションホールをその隣接地に建設します。今後は道の駅と連携して集客や情報発信をより積極的に図り、展示会なども適宜行うことで新たな販路の開拓を目指していくつもりです。

聖域的な静謐（せいひつ）さに満ちた「播州三木打刃物伝統工芸士」の仕事場風景（写真は鑿づくりの名人・高橋亮一さん）

また、産官学の連携で地域の金属工業のけん引役を果たしてきた県の『機械金属工業技術支援センター』が数年後には廃止されるため、地場産業の技術力を生かした自力による新たな商品開発、デザイン開発も急務となります。そういう意味合いからも今後、金物産業の活性化については、厳しい市の財政状況の中でも、ほかの事業を延期してでも整備を進める必要があると決断しています」（藪本市長）

「ひょうご情報公園都市」が代表する外部からの企業誘致にも大きな雇用効果が今後期待されるが、やはり伝統ある地場産業の元気を取り戻し、発展を促進することは、地域アイデンティティの醸成や、市民および職員のモチベーションにも大きくかかわってくることが予測される。金物産業の振興はそうした観点からも、三木市の「日本一美しいまちづくり」の成否を占う大切な要素といえる。

「平成21年度は三木市にとって市制55周年の節目に当たります。昨年9月に発した財政危機宣言に対応する『新行財政改革プラン』の取り組み初年度でもあります。市民協働、地場産業振興、外部からの企業誘致など、現在精力的に行っていることのすべては、将来の三木市にとっての『種』であり、私たちは厳しい財政状況にもひるむことなく、将来の実り多き収穫を目指し、あらゆる角度から種まきを続けていかなければなりません」（藪本市長）

三木市は、市の財政を圧迫し続けてきた三木市民病院に関して、隣接する小野市との統合病院の設置にも基本合意した。新統合病院の設置場所は、あらゆる条件を合理的に判断し、小野市とすることに合意した。自らの新たな発展のための、さまざまな勇気ある決断と将来への布石を次々と打ち続ける三木市の「日本一美しいまちづくり」が、今後も注目される。